

日穩-bion- 第十三回公演

「明日花」(あしたばな)

脚本…岩瀬晶子

登場人物

文山(仁科)良夫
ふみやま にしな よしお

花火大会実行委員

小野竹次郎
おの たけじろう

花火師

小野久美子
おの くみこ

竹次郎の娘

田島勇作
たじまゆうさく

竹次郎の弟子

小山内博士
おさないはかせ

竹次郎の弟子

高林堂
こう りんどう

中華料理屋「りんどう」店主

鈴木トキ江
すずきときえ

豆腐屋

小野清
おの きよし

竹次郎の息子

影山剛
かげやま つよし

地上げ屋

橋本春子
はしもとはるこ

良夫の元妻

昭和25年（1950年） 夏 神奈川県浅丘町（あさおかまち）

中国人・高林堂（こうりんどう）が経営する中華料理屋「りんどう」の店先。外に簡単なテーブルが二つと、その周りに丸椅子が置かれている。隣には塀に囲まれた小野煙火店の作業場があり、「りんどう」の奥にある部屋は花火大会の簡易事務所として使われている。

薄暗い照明の中、椅子に座り、ノートに何か書いている良夫。

別空間に軍服姿の清が浮かび上がる。

出征時の「ばんざーい！」の声、戦場の爆撃音、叫び声等が聞こえてくる。

良夫、書き終わり、鉛筆を置いてノートを閉じ、ゆっくり目をつぶる。

後ろから覗き込むこの店の主人・高。

明転

へ 1 へ

高 何か出て来る？

良夫 えっ！？・・・あ、いや・・・。

高 今、念力送ってたんでしょ？私、前に中国で見たことあるよ、本に念力送ると、中からハトでてくるの。あんた魔法できる？

トキ江 それは手品でしょう？

高 あんた手品できるの？！

良夫 できません。

高 なんだ、ハト出してくれたら店で出せるのに。

トキ江 食べる気？

高 中国でハトはご馳走だよ。

トキ江 そうなの？

良夫 あ、出た！

高 ハト？！

良夫 アブラムシ、そこ！ほら！

高 えっ？きゃー！！私、アブラムシ嫌い！！（と逃げ回る）

トキ江が店の奥に入り、サンダルの裏でバン！と殺す。

高 おお！

トキ江 いちいち大騒ぎするほどのもんじゃありませんよ？いい大人がみつともない。

高 さすが、トキ江ちゃん、かっこいいね。

りんどうを手伝っている久美子が出前から帰ってくる。

久美子

ただいま！

高

おかえりー、玄さん、つけの分払った？

久美子

ちゃんとしたきましたよ、はい。(と高に渡す)

高

やった！やっぱり可愛い女の子だとじえんじえん違うね。借金取りは女子供に限る！

久美子

もー、借金取りだなんて人聞きの悪い。(良夫に) 勇作さんたちはまだ作業場ですか？

良夫

今日は試し打ちで河原に行ってます。

久美子

ああ、そうでしたね。

トキ江

いよいよ二週間後かぁ・・・楽しみだね、花火大会。

久美子

父さん、張り切ってるもの。花火大会が決まってから、花火のことで

以外話さないの。これもブンさんのお陰です。

良夫

いや、俺は何も・・・

久美子

ブンさんがこの町に来て、どうしても浅丘町の花火大会を復活させ

たいってみんなを説得してくれたから、実現できたんだもの。

そうだよ、ブンちゃん、この町のボンジン。

恩人でしょ？

良夫

恩人なんて大袈裟ですよ。俺は、竹さんの花火をもう一度見たかった

ただけですから・・・。

トキ江

でも、そんな簡単にできる事じゃないよ。よその町からやって来て、

役場や商店会に頼み込んで、資金集めまでしたんでしょ？

久美子

大きな都市(まち)じゃ、終戦の二年後には花火大会やるところも

あったのに、この町じゃ「花火どころじゃない」ってみんな取り合

つてもくれなかったし。父さん「俺はもう花火やらない」って言った

たの。だからブンさん、本当にありがとう。

やめて下さいよ。俺は本当に、竹さんの花火をまた見たい、それだ

けなんです。

職人冥利に尽きるね。

トキ江

父さん、あんまり気持ちを表に出さないけど、本当はブンさんにそ

う言ってもらって、ものすごく喜んでるんですよ。

近くの河原で花火の試し打ちを終えて帰ってきた花火師の弟子、勇作と博士がやってくる。

勇作

ういっす！

高

いらっしやい！

久美子

おつかれさま。

高、店の奥へお金を置きに行く。博士は自分が座る椅子を手ぬぐいで拭く。

博士 いや、すごい音でしたねえ。ビックリしました！
勇作 今日は3寸玉だけど、尺玉上げてみる。耳聞こえなくなるぞ。
博士 あれ何寸玉ですか？
勇作 だから、3寸だつて。
博士 5寸くらいかな？
勇作 3寸だつて言つてんだらう！
博士 いや、5寸より大きいですよね。
勇作 聞こえてねーのか！
久美子 試し打ち、どうだったの？
勇作 青の出方がイマイチだったな。白っぽくなつちまつて。
久美 また父さん機嫌悪くなるかな。ビール？
勇作 いや、片付けしなきゃなんねーから。
久美子 じゃ、麦茶？
勇作 ああ。

高、もどつてくる、久美子は奥へ。

高 (博士に) 間近で見る花火は迫力あるで・・・
博士 (高にかぶせて) 間近で見る花火は迫力満点ですよ。高さん、打ち上げ現場行った事ありますか？
高 あるよ、昔、竹さんに頼み込んで・・・
博士 ないでしょう？なかなか普通は行けないですもん。いや、感動しますよ。遠くで見るのと全然違う。
高 あんた話聞いている？
勇作 聞こえてねーらしい。
高 ああ・・・

勇作、手を洗いに奥へ。久美子、麦茶を持って出てくる。

久美子 はい、どうぞ。

博士 ありがとうございます

隣から竹次郎の声が聞こえる。

竹次郎 (声) おい博士、片づけ残ってるぞ！

博士 (麦茶を飲んで) あく、喉がカラカラだったから美味しいなあ。

竹次郎が入ってくる。

竹次郎 博士！

博士 (聞こえてない)

竹次郎 自分で出した物は自分で片づける。(と後ろから頭を叩く)

博士 痛たっ！えっ？

竹次郎 片づけ！

博士 浅漬け？

竹次郎 いいから、来い！(と手をひっぱり連れていく)

博士 えっ！ちよつと・・・

竹次郎と博士、出ていく。

勇作 だから初めての時は耳栓しろって言ったのによ。

と勇作もついて行こうとするが、

竹次郎 (奥から声だけで) こいつにやらせるからいいよ！

勇作 お、いいんですか？ありがとうございます！

久美子 父さん、やつぱり機嫌悪い。

勇作 でもオヤジさんはあじゃねーとな！花火やってる時のオヤジさ

んはやつぱりカツコイイや。

久美子 そうね。

高 ビールね。

勇作 ああ。(良夫に) おい、ブンちゃんもたまには一杯どうだ？

良夫 ……あ……いえ、俺は……

勇作 いいじゃねえか、こうしてまた花火作れるようになったのもあなた

のお陰なんだから。たまにはおごらせろよ。

良夫 ……じゃあ、一杯だけ。

勇作 いやー、そうこなくっちゃ。

トキ江 (自分が座つてた席を移動して良夫に譲りながら) なんだ、あんだ

飲めないのかと思つてたよ。

良夫 (久美子に) ラムネ下さい。

トキ江 飲めないのか。

勇作 飲めそうな顔してるのにな。

良夫 すみません…。(座つて) 勇作さん、花火で出したい色出すのつ

て、そんなに難しいんですか。

勇作 ああ、単に「青」つたつてよ、混ぜる薬剤の配合によって全然色が

違ってくる。何をどのくらい混ぜるかは、職人の勘が頼りなんだ。

良夫 勘ですか、一人前の花火師になるにはどのくらいかかるもんなんで

すか？

勇作 「玉貼り三年、星かけ五年」なんて言うけどな、実際出してえ色や

形を作れるようになるには何十年もかかる。俺もオヤジさんの弟子

になつてようやく星づくり任せてもらえるようになったと思つたら戦争が始まつちまつたからな・・・

トキ江

星って何？

勇作

花火玉の中に入つてる火薬の粒の事だ。ほら、作業場の裏に菜の花

畑があるだろう？

トキ江

菜の花？ああ、春には綺麗に咲いてたね。

勇作

あの菜の花の種を芯にして、そこに火薬と薬品を混ぜた「和剤」を少しづつまぶしていく。それを天日干しで完全に乾燥させる。まぶして乾燥させるつて、この作業をなんべんもなんべんも繰り返して（指でしめして）このくらいの大きさに育てるんだよ。

トキ江

育てるんだ。

高、久美子出てくる

勇作

そう、大切に育ててるの。だからそいつら一粒一粒が収まつてる花火玉は、自分の子供みてえにかわいくつてな・・・その我が子がよ、

久美子

晴れ舞台に夜空で大輪の花を咲かせるんだ、感無量よ。

勇作

私覚えてる、勇作さん、はじめて作った花火が打ち上がった時、目

高

真つ赤にしたの。

トキ江

なんだい久美ちゃん、そんな事覚えてんのかい・・・ま、オヤジさんの花火には適わねえけどな。

高

竹さんの花火は凄いよ。初めて見た時、すごいカンチョウした。

トキ江

カンドウでしょ？

勇作

それそれ、感動した！もうずいぶん前に見たきりね。何年ぶり？

高

支那事変が始まつた年が最後だったから、かれこれ13年ぶりか。

トキ江

そんなになるか。

勇作

張り切つてるわけだね。

良夫

ああ、戦時中は花火大会どころじゃなかつたもんな。火薬は火薬でも、軍需工場で爆弾作つてたんだから・・・ようやくだ。（良夫に）

勇作

ブンちゃん、いつオヤジさんの花火見たんだ？

良夫

13年前です・・・

勇作

そうかあ、あれ見たのか。

良夫

素晴らしかったな。

勇作

あん時の花火はまた特別だったからな。そういや、ブンちゃん、この町に来る前は何かやってたんだ？

良夫

・・・兵隊です。

勇作

いや、その前だよ。

竹次郎と博士が入ってくる。

竹次郎と博士が入ってくる。

竹次郎 だからうるせえんだよ、お前さんはよお！！
博士

いいんじゃないかと言ってるんです。僕の計算通りにすれば、絶妙な青が出て来るはずなんですよ。

竹次郎 実験室で見るのと夜空に上がったのでは色の見え方が違うんだよ。

博士 いや、しかしですね・・・

高 もう終わった？

竹次郎 いや、一服だ。こいつがうるさくてよお。高さん酒。

高 はいよ。(と奥へ)

博士 (トキ江が座ってる椅子をじっと見て)・・・あの、その椅子いいですか？

トキ江 ああ、ここ、あなたの指定席か。(立って)どうぞ。

博士 すみません。(椅子を手ぬぐいできれいに拭きだす。)

トキ江 ちよつとお、私はバイ菌か？

博士 あ、気にしないでください。確かに、人の体内に生息する細菌の数は百兆を超えと言われておりますが、これはたんに僕の癖です。別にトキ江さんがバイ菌の塊と言っている訳ではありません。あんたさ、中学の先生だったんだって？なんで花火作りやってんの？

博士 あ、僕、化学が大好きで、火薬の調査に興味があつたものですから。是非お手伝いしたいと思ひまして。強力な助っ人として。

竹次郎 助っ人ってのは役に立ってくれる人の事を言うんだよ。

博士 (自慢げに) はい、その通りです。

トキ江 名前は役に立ちそうだよ。

勇作 普通は博士(はかせ)って書いたら、ひろしって読ませるけどな。博士ってなあ、名前負けだろう。

博士 僕は名前呼ばれる時、一目置かれて得してますよ。

勇作 ああそうかい。

高、酒を持って出て来る。

高 どうぞ。

竹次郎 悪いな高さん、店の裏、花火大会のために使っちゃまって。

高 いいのいいの、どうせ大して使ってないんだから。

良夫 本当に助かってます。店も事務所代わりに電話まで使わせていただいで・・・

高 竹さんの花火もう一度見るためなら、私、ひとほらふくよ。

竹次郎 ・・・・ほら???

久美子 ・・・・ひと肌ぬぐでしよ?

高 ああ、それぞれ、ひとはらぬく。
勇作 はらぬくってなんだよ。肌だよ、肌。

高 肌？

勇作 そう、肌を脱ぐの。

高 肌を脱ぐ?? どうやって？

勇作 いや、知らねーけど。

高 あやう、痛い痛い出来ない！それはいくら竹さんのためでもできないよ！

竹次郎 俺も脱がれても困るな。

高 日本語怖いね。おったまげます。

良夫 そう言われれば、変な言葉ですね。

高 日本語、怖い言葉いっぱいありますよお。「頭が切れる」とか「喉から手がでる」とか・・・喉から手でないでしょ？あと・・・へそでちやを沸かすとか・・・どうやるの??

一同、笑う。

良夫 あんまり気にしないで使ってたけど、なるほど、目からうろこだ。

高 目からうろこ?!

勇作 「うろこ」だよ、魚の。目からうろこは出ねえだろう。

高 うろこも出ないよ。目にうろこないでしょ???

博士 (自慢げに) その言葉はですね、キリスト教の『新約聖書』に由来する言葉です。キリスト教徒を迫害していたパウロは、その罰で失明しますが、イエスはその目を元に戻すべく弟子を彼のもとに遣わし、その弟子が彼の体に触れると、「目から鱗のようなものが落ちて」再び目が見えるようになったというところからきています。

間

良夫 俺、帰ります。

勇作 (博士に) お前のせいだぞ！

博士 えっ? 何ですか?

久美子 あ、ちよつと待っててください。(と奥へ)

良夫 すみません、うちに帰って書類の整理しようと思って・・・

勇作 悪いなあ、なんか手伝う事があったら言ってくれ。

良夫 いえ、要領が悪いだけです。皆さんは花火作りに集中して下さい。

久美子 (包みを取ってくる) これ、おすそ分け。

良夫 ありがとうございます。

久美子 おはぎです。

良夫 あ、はんごろし！
一同 えっ？

勇作 はんごろし？

良夫 ああ、すみません、自分が育ったところでは、そう呼ぶもので・・・
勇作 物騒だな、おい。

良夫 米を半分潰すからはんごろしと言うんです。好物です、ありがとうございます。
久美子 ございます。

久美子 良かった。それから、これ・・・この間忘れていった靴下が破れて
いたので、洗って縫っておきました。

良夫 ああ、すみません、わざわざ。助かります。

久美子 いえ、皆さんのお世話をするのも私の仕事ですから。

博士 あの！実は僕の靴下も穴が開いてるんですが・・・

久美子 じゃあ、後で繕っておきますので、置いてって下さい。

博士 本当ですか？？ありがとうございます！家にも三足ほどあります
ので、日替わりで持ってきます。

勇作 調子に乗るな。

博士 ブンちゃんさん、また明日。

良夫 おやすみなさい。

良夫、出ていく。久美子、奥へ。

トキ江 いい人だねえ。

竹次郎 半年前に訪ねて来て、いきなり花火大会やりましょう！って言い出した時は、よそ者が何言ってるやがると思っただけだな。本当に実現しやがった。

博士 でも僕、ブンちゃんさんと、どこかで会った事があるような気がするんですよね・・・

勇作 お前さ、そのブンちゃんさんて呼ぶのやめろよ。ブンちゃんかブンさんだろう、普通。

博士 僕年下ですから、ブンちゃんというのは抵抗がありますし、ブンさんというのもなんだか・・・文山さんというのはよそよそしい感じがするので、あいだを取ってブンちゃんさんなんです。

勇作 足しちゃってんだよな。

博士 どこで見たんだろうなあ・・・

勇作 あいつ自分のことあんまり話さねえからなあ。

竹次郎 ひと様の事、詮索するもんじゃねえ。

勇作 へっい。

トキ江 私も叩かれたら埃だらけだからね。

高 トキ江ちゃん叩く人、高さんが許しません。

トキ江 あら、ありがとう。

久美子 (声) ああー!!

勇作 なんだ?

久美子 (出てきて) やだ、私、玄さんの所に岡持ち忘れてきちやった。

高 あれまあ。あんな大きいもの、よく忘れたね。

久美子 ごめんなさい、急いで取ってきました。

博士 (立ち上がって) あ、僕がご一緒させていただきます!

久美子 いえ、すぐそこですから。

博士 いや、でももう暗いし、危ないなあ

勇作 お前の方が危ないよ。

久美子 すぐ戻ってきますから。

久美子、出ていく。

竹次郎 あいつのおつちよこちよいは治らねえな。

博士 そこが可愛らしいんじゃないですかあ。

勇作 久美ちゃん、随分元気になったよな、花火大会が決まってからさ。

高 そうだねえ

勇作 清も喜んでるだろうな。

博士 清?

勇作 久美ちゃんの弟だ。

博士 ああ・・・

竹次郎・・・(博士に)さて、やっちゃまうか。

博士 はい・・・

勇作 へい。高さん、ありがとう。

高 はいよ!

竹次郎、勇作、博士、作業場の方へ。

トキ江 私も帰るわ。明日の仕込みがあるし。

高 明日もトキ江ちゃんのお豆腐楽しみにしてるよ。大豆持ってくる?

トキ江 今日はいいわ。ありがとう。じゃあね。再見(ザイチェン)!

高 謝々(シェシエ)!

電話が鳴る。

高 (飲み物を片づけながら) ハイハイ、今行くよ。ちょっと待ってて。

高、店の奥に入る。

暗転

場面は変わって、戦時中のフィリピン・ルソン島。

座って手紙を読んでいる軍服姿の良夫が浮かび上がる。

良夫の部下・小野清が後ろから声をかける。

清 分隊長殿。

良夫 ん？

清 塹壕設営、完了しました。

良夫 ああ、ご苦労。

良夫、手紙に同封されていた写真を見ている。

清 お子さんですか？

良夫 ああ（写真を見せて）孝夫って言うんだ。

清 おいくつですか？

良夫 来月でちょうど一歳になる。

清 分隊長殿によく似てらっしゃいますね。

良夫 そうか？目は俺に似てるかな。この鼻はかみさんだ。

清 可愛いですね・・・

良夫 結婚して暫く子供ができなくて、ようやく生まれた息子なんだ。

清 そうですか・・・

良夫 お前、結婚は？

清 いえ、自分はまだ・・・相手もおりません。

良夫 そうか、まあまだ若いからな。

清 分隊長殿は大恋愛の末、奥様と結婚されたそうですね。

良夫 誰だ、そんな事を言ったのは・・・

清 浅川伍長がおっしゃっていました。とてもお似合いのご夫婦だと。

良夫 あいつ、余計な事言いやがって。

清 ご家族は東京にいらっしゃるんですか？

良夫 いや、かみさんと倅は富山に疎開させた。うちの奴とは同郷でな。

清 富山ですか。自分は日本海の方には行ったことがありません。どん

な所ですか？

良夫 いいところだぞ。前は日本海、後ろは山に囲まれてな。立山連峰

は絶景だし、とにかく海産物がうまい。お前、ホタルイカの沖漬け

なんて食った事ないだろう？

清 はい、ありません。

良夫 うまいぞー！炊き立ての銀シャリに乗せてかつこんだら最高だ。

清 腹が減ってきましたね。

良夫 戦争が終わったら、一度富山に來い。思いっきりだいてやる。

清・・・だ、だいてやる？？

良夫 ああ、富山弁で「おごってやる」という意味だ。

清 「だく」と言うんですか。びっくりしました。

良夫 ハハハ！じゃあお前、（正座して）これ何という？

清 「正座」ですか？

良夫 これは「おちんちんかく」。

清 ……からかつてらっしやるんですか。

良夫 富山ではそう言うんだ。親が子供に「あんたら、おちんちんかいて行儀ようしとれま！」と説教するんだ。

清 そうなんですか。富山に行く前に聞いておいて良かったです。

良夫 じゃあ、お前もおちんちんかいてみる。

清 それでは、失礼して…おちんちんかかせていただきます！（正座する）どうでしょうか？

良夫 なかなか良いおちんちんだ

清 ありがとうございます！

良夫 ハハハ！

遠くから、「小野二等兵！…飯の支度だ！」と声がかかる。

清 はい！

良夫 今日の晩飯は何だ？

清 醤油メシです。

良夫 またか。たまにはブリの刺身でも食いたいな。

などと言いながら、二人去る。

へ 3 へ

「りんどう」1場の1週間後 夕方

トキ江が豆腐を持ってくる。そこに作業場の方から顔に傷のある影山がやってくる。

影山 （作業場の方に向かって）くそ、がんこなジジイだ！

トキ江

影山 （トキ江を見つけて驚き）おお！おめえトキ江じゃねえかよ。

トキ江 なんだあんた…

影山 何してんだ、こんなところで？

トキ江 ……あんたには関係無いだろ…

影山 久しぶりに会ったのにつれねえこというなよ。金も食いもんも無く

てどうしようもねえ、いつそ死にてえなんてピーピー泣いてたから、手っ取り早く稼げる商売紹介してやったんじゃねえか。

トキ江 ……その稼いだ金でやっとここで豆腐屋始めたんだ。

影山 なにお前豆腐屋なんてしけた商売やってんだよ
トキ江 ほっといてよ・・・

影山 一度体売った女はそう簡単に堅気になんか戻れねーぞ。
トキ江 ・・・・何であんたこの町に来たんだよ。

影山 仕事だよ。
トキ江 仕事？この町で？

影山 ああ、隣の花火屋のじじいとちよつと話があつてな。お前はせいぜい
トキ江 旨い豆腐でも作ってる。
・・・・

影山 去る。トキ江は「りんどう」に入る。
暗転

へ 4 へ

「りんどう」前場の3日後 昼間
店先で花火玉用の紙を切っている勇作。高が汗を拭きながら出て来る。

高 暑い・・・

勇作 高さんもやつぱり暑くて、中じや仕事できないか。

高 はい、お客さんもみんなそう言う・・・

高、椅子に座って花瓶を磨き始める。

勇作 高さん、その花瓶、高いの？

高 高いよ。

勇作 花瓶で思い出したんだけどさ、俺の知り合いだよ、闇市で将来値が
上がるとか言われて、高い花瓶買った奴がいるんだよ。そいつがこ
の間調べてもらったら、偽物だったって話だよ。

高 詳しく知らないよ、偽物つかまされます。

勇作 そうだよな。で、何が言いたいかっていうとな、その花瓶そっくり
だ。

高 ・・・・その人の話を詳しく聞かせてもらえますか？

作業場の方から良夫がやってくる。

良夫 勇作さん、作業場で竹さんが呼んでますよ。

勇作 おお、そうか。あ、そーいやブンちゃん、カバン見つかったか？

良夫 いいえ・・・

高 カバン？

勇作 ああ、一昨日打ち上げ現場に下見に行った時、置引きにあったんだ

と。

高 あらう、大変！大事なもの入ってた？

良夫 ……ええ、まあ……

高 お金？

良夫 いえ、金目のものは何も入ってなかったんですが……ノートとか、

書類とか……

高 あの念力ノート？

良夫 まあ……

高 じゃあ出て来るよ、鳩と一緒に。

良夫 そう願ってます……。俺、注文した紙を取りに行ってくださいね。

勇作 おう、ご苦労さん。

勇作、作業場の方へ。出て行こうとする良夫を高が引き留める。

高 ブンちゃん、ねえ、ちよつとちよつと。

良夫 なんですか？

高 あのね、お願い事がある。叶えてくれる？

良夫 はあ……俺にできる事なら、もちろん。何でしょう？

高 じゃ、これお賽銭ね。（小銭を渡し、柏手を打って拝む）

良夫 いや、俺神社じゃないから。

高 いいのいいの、気持ちだから。

高、店の中に入り、封筒を持って出て来る。

高 これ……

良夫 えっ？

高 読んで。

良夫 何ですか？

高 恋文。

良夫 えっ？

高 心こめて書いたから。

良夫 そうですか……でも……

高 ダメ？

良夫 いや、ダメと言うか……

高 読んだら気持ち聞かせてほしい。

良夫 気持ち？

高 そう、私、結婚したいと思ってる……

良夫 ……結婚？……

高 トキ江ちゃんと。

良夫 えっ？……トキ江さん？……ああ、結婚、トキ江！

高 声大きい！呼び捨てダメよ。
良夫 ああ、すみません。

高 直接言って断られたら怖い。だから手紙書いたけど、自信ないです。
間違ってたら嫌でしょ。

良夫 ああ、それで俺がその手紙を添削すると。
高 とんそく？

良夫 あ、直す事です。
高 ああ、そうそう。

良夫 そういう事ですか。ビックリした。
高 何だと思った？

良夫 いえいえ、何でも。

高 宜しいですか？ブンちゃん、トンソクさんより・・・ん？トンソクさん？あ、勇作さんよりそういうの得意のそうだから。
良夫 それなら喜んで協力しますよ。

高 よかたー！
良夫 俺も良かった。

高 じゃ、これお供え物ね、なまごろし（おはぎを渡し、手を合わせて
拝む）

良夫 ああ、どうも・・・じゃ、行ってきます。
高 行ってこい！

良夫 はんごろし・・・ね（食べながら出かける）

良夫と入れ替わりに影山がやってくる。良夫とぶつかる。

影山 （奥で）おい、気をつけろ！

良夫 （奥で）すみません。

影山 （高に）おう。

影山、店に入っていく。

高 すみません、お店、今支度中・・・あの・・・

影山 （出てきて）良い店だな。

高 ありがとうございます。

影山 あんた、商売上手くいってんのか。

高 はい、おかけさまで・・・。

影山 花火大会の協賛金もたっぷり出してるんだってな。

高 竹さんの花火のためですから。中国人の知り合いにもいばい頼みま
した。みんな楽しみにしてる。

影山 なんてったってあんたの国は戦勝国だもんな。GHQから特別配給
貰って日本で稼ごうってんだから、見上げた根性だ。

高 ……
影山 あんた国には帰らねえのか。

高 私、中国にもう家族いませんから…
影山 ほお…

高 でも、ここには友達、たくさんいる。

影山 ふうん、友達…本気であんたらを友達だと思ってる日本人がい
ると思うか？

高 ……

影山 なあ、あんたここ出てっくんねえか？
高 えっ？

影山 ここらにマーケット作ろうと思ってるんだ。

高 マーケット？

影山 そう、朝鮮で戦争が始まったからよ、日本にいたアメリカさんがど

んどんそっちに流れてるわけよ。で要らなくなつたものを売ってえ
奴がゴマンというもんで、それを引き受けてやろうと思ってるな。

高 でも、ここは私の店ですから。

影山 おいおい、笑わせるんじゃないよ。ここは日本だ。俺たち日本人の
土地じゃ。とつとと自分の国に帰れや。

高 ……
影山 また来るからよ。

影山、去る。勇作が帰ってくる。

勇作 さっきの話の続きなんだけど、その高い花瓶買ったってのが、実は
俺なんだけだよ。

高 ……

勇作 高さん、今笑うとこだぞ！（様子がおかしい高を見て）どうしたん
だ、高さん？

高 なんでもないよ。

勇作 高さん？

高、ため息をつきながら、奥へ。

そこへ、春子がやってくる。

春子 こんにちは。

勇作 どうも

春子 あの…人を探しとるんですが…

勇作 人探し？

春子 仁科良夫という人です。しつとられませんか？

勇作 仁科？知らねーなあ。高さん、仁科って人、知ってるか？

高 になん？しらない・・・
勇作 どんな人？写真とかないのかい？
春子 それが・・・駅で写真の入った荷物盗まれてしても・・・
勇作 そりゃ災難だったな。
春子 それで、似顔絵を描いてみたがやですけど・・・。私、全く絵心がないもんで、分かるかどうか・・・

春子、絵を描いた紙を取り出し、高に渡す。

高 ……これ、人？

春子 ……やっぱり分からんですか。

勇作 うくん・・・

春子 ……(ため息)

高 ……麦茶飲むか？

春子 ああ、すみません。

高 ここ、座って。(と麦茶を取りに奥へ)

勇作 ここら辺で見た人がいるのかい？

春子 いえ・・・実は、この町の復興事業を伝えるニュース映画を映画館

でやっとなって、後ろの方に映った人が、よう似てたもんで・・・。

勇作 それだけ？

春子 ええ・・・このお店も映ったもんですから、思い切って来てし

もたがです。

勇作 どっから？

春子 富山です。

勇作 富山！そりゃまた随分遠くから・・・

高 (麦茶を出して) どうぞ。

春子 ありがとうございます。(飲む)

勇作 高さん、富山からだってよ。

高 富山、どこ？

勇作 知らねーのか。広島横だよ。

春子 それは岡山ですねえ。北陸の方です。

勇作 ああ・・・で？

春子 もし、万が一、知つとられる人がおったら、連絡もらえませんか？
勇作 ようか。駅前の「三河荘」に泊まっております。私は、はしも・・・
春子 ……

勇作 ……春子と言っていただけば分かります。

春子 はいよ。その仁科さんて何してる人なんだ？

高 作家です、童話の。

高 ドアの作家？

春子 童話を書く人です。

高 ドアをかく人？（ドアを掻くジェスチャーをしながら）これ仕事？
勇作 そんな仕事があったら、俺がしたいよ。ドアじゃなくて童話だよ。
だろ？

春子 ええ、子供の本です。

高 あり、子供の本！・・・をドアに・・・書く？

勇作 （春子に）後で説明する。

春子 はい。

勇作 ラジオの「尋ね人の時間」は試したかい？

春子 ええ、何べんも・・・戦死公報が届いとったがやけど・・・

勇作 戦死公報？

春子 戦争が終わって2か月後に届いたがです。白木の箱に、紙切れ一枚

だけ入って・・・これで見つからなかったら、諦めもつくかあお
もて。

高、急に泣き出す。

勇作 どうしたんだ、高さん！

高 （泣きながら）私、そういう話弱いね・・・

春子 あ、すみません、見ず知らずの方にこんなお話して・・・

高 その人、見つかるの良いね。

春子 ええ・・・（立ち上がり）あの、ご迷惑ついでにご不浄を拝借して

も構いませんか？

高 ボクジヨウ？

勇作 ああ、入ってね、奥の右側。

春子 すみません。

春子、奥へ行く。

高 ボクジヨウ？

勇作 ご不浄だよ。便所のこと。

高 ああ

勇作 ・・・・気の毒だけどよ、戦死公報が届いてるんじゃないあ・・・

高 でも、角の酒屋の息子さん、死んだと思ってたのに、去年シベリアか

ら帰ってきたよ。

勇作 世の中にはあの人みてーのがごまんというんだろうな。

高 切ないね・・・

勇作 （春子を書いた絵をまじまじと見て）しかしここまでいくと、むしろ
芸術的だな。

良夫、帰ってくる。

勇作 あれ？早いな、どうしたんだ？

良夫 発注書忘れてしまつて……

高 あらら……

良夫、奥に行く。

良夫(声) ああ、あつたあつた。(出てきて) しかし暑いですね。高さん、麦茶

いっばいいただけますか？

高 はいよ、ちよつと待つてて。(奥へ)

良夫 ありがとうございます。

勇作 おお、そーいやブンちゃん、この辺で仁科つて人、知ってるか？

良夫 えっ？

勇作 探してる人がいてよ。

奥で花瓶の割れる音がする。

春子(声) ああっ！すみません！！花瓶！

高(声) 大丈夫、ケガしてない？

春子(声) はい、あの……すみません……弁償しますんで。

勇作 (奥に向かつて) 気にすんな、偽物だから。

高(声) あんたが言うな。

春子(声) 本当にすみません。私、片づけます！

高 いい、いい、ホント、気にしないで。

春子と高が出てくる。良夫が驚いて立ち上がる。

良夫 春子……

春子 (良夫に気づいて)……良夫……さん

勇・高 えっ？

しばし見つめ合う二人。

間

勇作 あの……俺、作業場戻るわ。

高 あ、私も……ちよつとタバコ買いに……。

勇作は作業場へ。高も出ていく。

春子 ……生きておられたがですか。
良夫 ……
春子 よう、ご無事で……
良夫 ……
春子 お帰りなさい。

間

良夫 ようここが分かったな。
春子 ニュース映画に映つとつて……でも、本当に会えるとは……
良夫 ……
春子 いつ……戻られたがですか？
良夫 一年前や……日本に帰ってきた思たら……俺は死んだことになつた。

春子 ……ごめんなさい……
良夫 お前があやまることじゃないちゃ……子供がおるがやつて。
春子 ……(頷く)
良夫 男の子け？
春子 ……女の子です。
良夫 そうけ……
春子 良夫さん……
良夫 ……

良夫、たまらず作業場の方へ去る。
後姿を見つめる春子。そのまま椅子に座り込む。
そこに久美子が帰ってくる。

久美子 ……いらつしやいませ。
春子 ……どうも……
久美子 (店に入つて) あら、花瓶が……
春子 あ、私がさつき……すみません、片づけます。
久美子 いえ、大丈夫です。気にしないでください。
春子 すみません……

博士が来て、店の奥へ行く。

博士(声) 久美子さん、あつ花瓶がつ！僕手伝いますよ！
久美子(声) 大丈夫です。
博士(声) 危ないですよ、手怪我しないでくださいね。
久美子(声) すぐ終わりますから。どうしたんですか？

博士(声) 僕さつき物差し忘れてしまったので、取りに来たんですけど・・・
あ、ありました！！

博士、話しながら出て来る。

博士 いやー、しかし暑いですね。花火作るのがこんなに重労働だとは思
っていませんでした。僕、昔から体が弱くてですね、徴兵検査もそ
れで落ちたんです。まさかこの年になってこんな肉体労働やると思
っていませんでした。

久美子 とても助かってますよ。

博士 久美子さんの為なら、僕、頑張ります！では。

博士、去る。

久美子 すみません、父が隣で花火工場やってまして、花火大会が近いもの
ですからバタバタしてるんです。

春子 花火・・・

久美子 ええ、13年ぶりにこの町でもようやく。

春子 8月15日ですよね？

久美子 ええ、終戦の日です。でも、戦争が始まる前から、この町では8月
15日に花火大会をやっていたんです。昔、川が氾濫して亡くなっ
た方々の慰霊の為に・・・

春子 そうながですか・・・

久美子 町の人、とても楽しみにしてるんです。花火大会の復活はみんなの
念願でしたから。

春子 ・・・・私、この町の者じゃないがですけど、以前ここの花火見たこ
とあるがです。

久美子 そうなんですか。

春子 ・・・・忘れられん花火です。きれいだった。

久美子 思い出があるんですね、あの花火に・・・。

春子 ・・・・

久美子 あ、麦茶、おかわりいかがですか？

春子 いえ、もう・・・ごちそうさまでした。

久美子 ・・・・良かったら、ぜひまた花火見ていって下さい。

春子 ・・・・はい。失礼します。

春子、去る。久美子、春子を見送り、コップを持って奥へ。
そこに勇作が走り込んでくる。

勇作 久美ちゃん！大変だ、オヤジさんが倒れた！

久美子 えっ！
勇作 早くっ！

二人、作業場の方へかけていく。
暗転

へ5

「りんどう」4場と同じ日の夕方
勇作、高、トキ江、博士がいる。

トキ江 ドアを拭く人？

高 いやいや、ドアをかく人だよ。

勇作 違うだろう、童話を書く人だよ。

高 ああ、それぞれ。

トキ江 (博士を指して) これは？

高 椅子を拭く人。

博士 (椅子を拭きながら) 童話を書くって……作家って事ですか？

勇作 ンちゃんさんが？

勇作 ああ、本当は文山じゃなくて、仁科って名前らしい。

博士 仁科？……仁科……(大声で) ああーっ！

勇作 なんだよ。

博士 思い出しました！！僕が東京の学校にいた時、講演しに来た作家さんがいたんですよ。あれがブンちゃんさんだったんだ！どこかで見
た事あると思ってたんですが。

トキ江 講演？

博士 仁科良夫って言って、代表作が良い話でね、知りませんか？道端に
生えてる雑草が、色んな事があって、あれして何してこれするって
話です。

勇作 全然わかんねえ。

博士 戦争が始まってからは、確か、教科書にいくつか兵隊の話を書いて
ました。お国の為に命を捧げる勇ましい息子とその母親の物語なん
で、もう涙なくして読めませんでしたよ。

トキ江 作家先生か……人に歴史ありだね。

博士 で、その訪ねてきた女の人のというのが、奥さんなんですか？

勇作 まあ、そうじゃねえかなーって話だよ。

博士 でも奥さんがいたとしたら、何で帰らなかったんでしょう。(勇作
に) 何ですか？

勇作 俺に聞くなよ。

博士 しかも、何で作家先生がこんな町で花火大会やりたがったんでしょ
うね。

勇作 それはお前、オヤジさんの花火に惚れ込んだからだろう？自分で言
ってたじゃねーか。

博士 はあ・・・でも、わざわざ名前まで変えて・・・

高 誰にでも、人に言えない過去の一つや二つありますよ。

トキ江 ……

久美子、家から戻ってくる。

勇作 おう、久美ちゃん、どうだい、オヤジさんの具合？

久美子 とりあえず今は眠ってる。ごめんなさいね、心配かけて。

トキ江 疲れが溜まったんだらうね。

勇作 近くにいなながら気づかなくて、面目ない。

久美子 ううん、少し休めば大丈夫だろうって先生も言ってたから。

勇作 そうか・・・良かった。

久美子 今日はもうあがってください。

勇作 そうだな、じゃあ片付けだけして帰るか。

博士 はい。

勇作、博士、久美子出ていく。

トキ江 大丈夫かねえ

高 竹さん？大丈夫、強いの人だから！

そこに影山が来る。

影山 よお！

トキ江 ……何しに来たの？

影山 (トキ江を無視して高に) なあ、あんた、この店の事考えてくれた
か？

高 ……

トキ江 この店ってどういう事？

影山 (トキ江に) お前には関係ねー。(高に) 俺だつてさ、手荒な真似
はしたくねーんだよ。ただよ、あんたみたいな奴らにこの辺りウロ
ウロされるのが目障りだよお。

トキ江 ここはあんたの町じゃないだろう！高さんは昔からここに住んで
るんだ。

影山 おめえ、こいつの肩持つのか？チャンコロは信用できねえぞ！俺
は大陸でこいつらに殺されかけたんだ！お陰でこのザマだ。

高 ……

影山 さっさと花火屋のじじい連れて出てけよ。

影山、高の胸ぐらを掴む。

トキ江 やめて！やめてよ！

良夫が帰ってくる。

良夫 どうしたんですか？

影山 (良夫に気づいて) なんだお前？

良夫 ……

影山 ああ、お前が・・・文山か？

良夫 ……はい。

影山 余計な事しやがって。花火屋のじじい、半年前まで立ち退く気でいたのによ、花火大会が再開するからどうかねえとか言い出しやがって立ち退き？そんな話があるんですか？

良夫 マーケット作るんだよ。花火なんかよりよっぽど世のため人の為だろ？

影山 ……

良夫 お前が花火大会なんて持ち出すからだ。おい、今からでも取りやめてくんねーか？

影山 そんな事できません。

高 (高に) おい、チャンコロ、来週まで待ってやるからよ、お前だけでもさっさと決める。

影山 ……

高 (良夫に) 大雨でも降りやいいな。

影山、出ていく。

良夫 高さん・・・

高 ……

良夫は作業場の方へ。

トキ江 高さん・・・

高 私は大丈夫、慣れてるから。

トキ江 あんな奴気にする事ないよ。

高 トキ江ちゃん、あの知り合い？

トキ江 ……

高 ごめんなさい、私変な事聞きました・・・

トキ江 ううん・・・(話を変えたくて)ねえ、高さんはいつ日本に来たの？

高 中国との戦争が始まる前。
トキ江 家族はもう中国にいないの？

高 ……はい。

高 あ、ごめん、私に変な事聞いた…。
トキ江 いいえ、いいです。トキ江ちゃんには話しておきたい。私、中国に奥さんいました。日本で働いたお金、送ってた。子供もいた。2歳の女の子。でも、戦争が始まって…。奥さんと子供、二人とも日本軍に殺された。

トキ江 殺された？

高 はい…。村ごと…。

トキ江 よく…。日本人を恨まなかったね。

高 恨みましたよ。殺してやりたいと思った…。でも、恨んでも奥さんと子供は帰ってこない。

トキ江 ……。

高 人が人でなくなる…。それが戦争。戦争がいけない。

トキ江 ……。

高 だから私、この「りんどう」始めました。意味知ってる？

トキ江 高さんの名前でしょ？高林堂（こうりんどう）。

高 そう、「高林堂」（平板に読む）って、よく本屋さんか和菓子屋さん
と間違われる名前ね。でも、そうじゃないの。日本に来て、私と同じ
名前の花あるの知りました。「りんどう」って青い花あるでしょ？
うん。

トキ江 花言葉知ってる？

高 りんどうの？…ううん。

トキ江 「悲しんでるあなたを愛する」

トキ江 ……。

高 みんな、色んな悲しみ持ってる。戦争で傷ついた人、愛する人を亡
くした人、たくさんたくさんいる。そんな人たち、私の料理で癒し
たいと思った。悲しんでる人に寄り添いたいと思った。私、中国人。
でも中国人も日本人もアメリカ人もみんな美味しいの物好き。同じ
人間。

トキ江 ……（急に泣き出す）

高 トキ江ちゃん？

トキ江 良い名前だね…。お店。

高 ありがとう…。（店の中から封筒を持ってくる）あの、トキ江ち
ゃん…。

トキ江 ん？

高 これ…。読んでくれるか？

トキ江 何？

高 私の気持ち…。

トキ江、封筒から紙を取り出して黙読する。

トキ江 ……高さん

高 (ドキドキして) はい!

トキ江 これが、高さんの気持ち?

高 はい。

トキ江 どういう意味?

高 どういうって……そこに書いてある通りで……

トキ江 これ、買ってきて欲しいの?

高 そりゃあ、もち……えっ?

トキ江 ビール12本、サイダー10本、焼酎3本……

高 えっ? (と紙を見て) ああ……これ、注文書。あれ?あれ? (と

トキ江 言いながら奥に入って封筒を探すが見当たらない) すみません……
ちやうど酒屋さん通るから、渡しとくよ。じゃあね。

トキ江、去る。

高 ……お願いしまーす……

高、しよんぼり店の奥へ。

へ 6 へ

再び、戦時中のフィリピン

良夫が清を眺めの良い場所に連れてくる。

清 良い眺めですね。

良夫 そうだろう。風も気持ちいい。

清 そうですね。

良夫 平時なら余暇を過ごすのにうってつけの場所なんだがな……

清 そうですね。

良夫 (座って) お前も座れ。

清 はい、失礼します。

良夫 なあ小野

清 はいっ!

良夫 お前の夢はなんだ?

清 夢……ですか。

良夫 ああ……戦争が終わったらどうしたい?

清 ……自分の作った花火を……打ち上げてみたいです。

良夫 花火?

清 はい、自分の父は花火師でして・・・
良夫 そうか、じゃあ親父さんの後継ぐのか。いい仕事だな。

清 ・・・・子供のころは嫌で仕方なかったんですが。

良夫 花火師がか？

清 ええ・・・自分が七つの時、花火大会の前日に、母が倒れたんです。
それでも親父は翌日、花火大会に行つて・・・結局母の死に目にあ
えませんでした。母より花火を優先した父が子供心に許せなく
て・・・それ以来、花火大会も見に行かなくなつたんです。

良夫

清 でも、支那事変の年、五年ぶりに父が作った花火を見て・・・感動
しました。それを作つた父を凄いと思いました。大勢の人が喜んで
いる姿を見て、自分もあんな花火を作つてみたいと思いました。

良夫

清 でも戦争で花火大会が中止、父にもそのことを伝えられぬまま、自
分は徴兵されてしまいました。だから、日本に帰ることができたら、
父の弟子になるつもりです。そして、花火大会を復活させたいと思
っています。

良夫

そうか・・・親父さん、喜ぶだろうな。

清

どうでしょうか・・・父もあれ以来、自分とはろくに口も聞かなく
なつて・・・

良夫

きつと喜ぶさ。喜ばない父親があるものか。

清

・・・分隊長殿は内地でどのような仕事をされていたのですか？

良夫

俺のことはいい。花火大会やる時は、是非知らせてくれ。かみさん
と俣連れて見に行くよ。

清

ありがとうございます！分隊長殿も、花火好きですか？

良夫

ああ、好きだ。・・・実はな、俺は花火を見ながらかみさんに求婚
したんだ。

清

そうなんですか！

良夫

ロマンチストだろ？

清

・・・どういう意味ですか？

良夫

伊達男つて事だ。

清

ああ、富山ではそう言うんですか？

良夫

お前なあ・・・

爆撃音と共に、「敵機来襲！敵機来襲！！！」という声が響く。

良夫

いかん、急げ！

二人、逃げる。爆弾が投下される音。

「りんどう」5場と同じ日の夜
浴衣姿で座っている竹次郎。本を持った久美子がやって来る。

久美子 ……父さん

竹次郎 風に当たりたくなつてな。(座る)

久美子 寝てなくて大丈夫なの？

竹次郎 ん……

久美子 風邪もひかない父さんが倒れるなんて、びっくりしちゃった。

竹次郎 もう年だな……

久美子 疲れがたまつたのよ。

竹次郎 こんな大事な時に面目ねえ。

久美子 あんまり無理しないで下さいよ。

竹次郎 ……段々母ちゃんに似てきたな。

久美子 ……そう？(絵本を開く)

竹次郎 こんなところで本読むのか？

久美子 これね……「明日花」っていう絵本。清が大好きでね、よく読ん

でたのよ。

竹次郎 どんな話だ？

久美子 道端に一本の雑草が生えていました。その草は、みんなに踏みつけ

られて葉っぱはボロボロで、綺麗なひまわりやユリの花みたいになりたいと思いつながら、自分は所詮雑草だからって下を向いてばかりいたの。でも、台風が近づいたある日、家族とはぐれたアリの子供が、その草の陰に隠れさせて欲しいってお願いしてきてね。こんな自分でも役に立てるならって、それはそれは必死に根っこに力を入れて、精一杯葉っぱを広げて全力でアリの子供を守つたの。アリは無事家族の元へ帰つただけど、その時のアリの笑顔が忘れられない雑草は、それから雨の日も雪の日も、どんなに踏みつけられても、決して下を見ず、もつともつと根を張ってぐんぐん上に向かつて伸びていった。いつしかその草の所にはアリだけじゃなく、色々な虫が集まつてくるようになって、みんなが笑顔になって帰って行く。するとある日、諦めてた蕾が出てきたの。その蕾は笑顔をもらった分だけ、少しずつ、少しずつ膨らんで行つたの……

竹次郎 で、どんな花が咲くんのだ？

久美子 それは分からない……

竹次郎 分からねえ？

久美子 読む人が想像する花だから。「明日、花が咲くでしょう」っていう

所で終わってるの。

竹次郎 ……

久美子 清、小さい頃は気が弱くてよくいじめられてたでしょ？でも、この

竹次郎 本を読んでから、弱音を吐かなくなったのよ。
・・・
久美子 清はどんな花、咲かせたかったのかなあ・・・
竹次郎 ・・・久美子・・・
久美子 ん？
竹次郎 母ちゃんが死んだとき、お前も俺を恨んだか？
久美子 ・・・母さんね、息を引き取る前、病室から父さんの花火見て、嬉しそうに笑ってたのよ。
・・・
竹次郎 清もきつとわかってたと思う。でもまだ小さかったから・・・
久美子 ・・・
竹次郎 父さん・・・
久美子 ん？
竹次郎 今年も菜の花、綺麗に咲いたわね。
久美子 ああ・・・あの花の種は良い星になる。

暗転

へ 8 へ

「りんどう」前場の2日後（花火大会2日前）昼間
勇作、博士が一服してる。高は日本語の勉強をしている。
そこに春子がやってくる。

春子 こんにちは。
高 ああつ。
春子 この間は花瓶をすみませんでした。これ、お詫びの印に・・・
高 そんな、気にしなくていいのに。
春子 いえ、本当にすみませんでした。
高 そう？ありがとうございます。（包みを受け取り開ける）あ、みなごろし！
春子 あ、いや・・・はんご・・・
博士 ブンちゃんさんの！
春子 えっ？
勇作 ああ、仁科さんね。
春子 ・・・ええ
勇作 ちよつと待ってな。今、呼んで来てやる。
春子 すみません。
高 私、これ竹さんと久美ちゃんに、おそでわけしてくる。
勇作 「すそ」だよ、高さん。

博士、座ったままで成り行きを見ようとしている。

勇作 お前も来い！（と博士の頭を叩く）
博士 痛っ！えー、なんでですか？
勇作 あんた、それでよく先生やってたな。

勇作、博士を連れて出ていく。
春子、バッグの中から、ふくさに包まれた小さな入れ物を出す。
少しして、良夫がやってくる。

良夫 ……
春子 ……もう一遍、ちゃんとお話したくて…
良夫 ……この間は悪かった。
春子 私こそ……花火大会があるがやそうですね。
良夫 ああ……
春子 あなたと二人でこの花火見てから……13年経つがですね…

間

良夫 ……今は東京におるが？
春子 いえ……ずっと富山です。母が空襲で肺をやられて、寝たきりになっ
てしてもて……
良夫 お義母さんが……
春子 ……孝夫の事は……
良夫 聞いた……
春子 これ……（と小さな容器を出す）あの子のお骨です。あなたにも
持つといってもらいたくて。
（受け取る）
良夫 あなたが出征した時は、まだ乳飲み子やったがですけど、随分大き
なって、あなたの写真見て「お父ちゃん」って言えるようになって
たがです。

良夫 ……
春子 ……あの子を守ってやれんで、申し訳ありませんでした。
良夫 ……空襲でか。
春子 はい
良夫 ……富山も酷かったがやろ……
春子 ええ……夜中に空襲警報が鳴った時には、もうすでにB29の大
軍が押し寄せて来とって、次々に焼夷弾を落としていったがです。
すぐに街は真っ赤な火の海になって……私は孝夫をおぶって、父
と母と一緒に逃げたがです。でもその途中、特高警察が道をふさい
で、「逃げるな非国民、火を消せ！」って……。私たちが必死に火

良夫 息がありませんでした。
春子 戦争が終わって二ヶ月後に、あなたの戦死公報が届いたがです。
良夫 生きる気力を失って、神通川に身を投げました。でも、通りかかっ
春子 た人に助けられて・・・それが・・・今の夫です。
良夫 ・・・そうけ。

間

良夫 遠くまでご苦労だった。・・・これで孝夫の供養ができっちゃ。
春子 ・・・良夫さん・・・もう一度、本を書いてください。
良夫 ・・・

春子 あなたは書くべきながです。
良夫 ・・・なん・・・俺はもう、何も書けんわ・・・
春子 なんて？

良夫 俺が戦時中に書いたもん読んで、大勢の少年たちが戦場に行って死
春子 なんだ！

春子 ・・・あなたのお気持ちはよう分かつとんがです。でも、私たちみ
良夫 んな同じ罪を背負うとる・・・戦争が始まったころは、みんなお
春子 国のため、鬼畜米英をやっつけろと熱狂しとりました。・・・でも
良夫 戦争が終わった途端、軍部のせい、新聞のせい、ラジオのせい、作
春子 家のせい・・・みんな人のせいにして、自分の罪をごまかしてき
良夫 たがです。あんな事になる前に、なんとかする事もできたかもしれ
春子 んがに、ただ流されてしもた。

良夫 ・・・
春子 だからこそ、あの戦争を体験したあなたに書いて欲しいがです。こ
良夫 の国がずっと平和でいられるように、孝夫のために・・・これから
春子 の子供たちのために伝えていって欲しいがです。それが、生き残っ
良夫 てしまった私たちの務めじゃないかと思うがです。
春子 ・・・

良夫 良夫さん、どうか書いて下さい。

春子 ・・・
良夫 ・・・
春子 あなた自身のためにも・・・

春子 ……お元気で……（お辞儀をして去ろうとする）

良夫 春子……

春子 ……（振り向く）

良夫 花火……見ていってくれま。

春子 はい……

春子、去る。

^ 9 ^

立ち尽くす良夫。別空間に瀕死の清が現れる。

清 鈴木二等兵、川川上等兵、戦死、香川上等兵、右大腿部負傷、加藤

良夫 二等兵、意識不明。

良夫 ……

清 自分たちはこんな小さな島で、一体何のために戦っているんでしょ

うか！

良夫 ……

清 この戦争は、アジアを欧米の植民地支配から解放する正義のための戦いと信じていました。でも、真つ赤なウソだった。何の罪もない原住民を殺し、お国のためにと、戦友は毎日弾に当たって死に、マラリアにかかって死に、飢えと渇きで死んでいく……その上、必死に守ろうとした大切な人たちが、本土で空襲に遭っている……。どうして我々はこんな戦争を始めてしまったんでしょうか！どうして後戻りできないところまで突き進んでしまったんでしょうか！！

良夫 ……あああああつ！！

暗転

^ 10 ^

「りんどう」同じ日の夕方

勇作と博士がくる

勇作 久美ちゃん、麦茶ちょうだい

久美子 はい

博士 僕もお願いします

勇作、座る。博士、相変わらず椅子を拭きだす。

博士 はあ、いよいよ明後日ですねえ、自分で作った花火が上がるなん

勇作　　で感動ですね、僕、勇作さんみたいに泣いちゃうかも知れません！
はあ・・・そうだなあ・・・

久美子　（麦茶を持って出てきて）はい、どうぞ。

勇作　　（久美子に）オヤジさん、大丈夫だよなあ？また医者行ったんだろ
う？

久美子　ええ、でも今朝は調子良いって言ってたし、念のため、もう一度診
てもらっただけだつて。

勇作　　良かった。オヤジさんが仕切ってさえくれりや、問題ねえ。そうい
やブンちゃんどうしたんだよ。

博士　　あれつきり帰って来ませんね。

勇作　　大丈夫かな、あいつ・・・

トキ江が豆腐を持って来る。

トキ江　　こんにちは！はい、お豆腐。

久美子　　あ、ありがとうございます！

トキ江　　遅くなってごめんね。

久美子　　いいええ（と奥に持っていく）

トキ江　　（勇作に）いよいよだね、楽しみにしてるよ。

勇作　　おう・・・

トキ江　　あれ？もしかして緊張してるの？

勇作　　いや・・・まあ、久しぶりだしな。

トキ江　　そうかあ、これで失敗でもしたら、二度と花火大会できなくなっ
ちゃうかもしれないもんねえ。

博士　　何言ってるんですか！失敗なんかするわけじゃないじゃないですか！

トキ江　　そうかなあ・・・

博士　　そうですよ、勇作さんがついてるんですから、失敗なんかしません
よ、絶対に！ね、勇作さん

勇作　　・・・俺、シヨンベン行ってくら。

勇作、奥へ。

トキ江　　（久美子に）どうしたんだい？

久美子　　勇作さん、前に打ち上げの順番間違えて、手伝いの人、怪我させち
やった事があるの。その事ずっと気にしてるみたいで・・・

トキ江　　そうなんだ。悪い事言っちゃったね。

博士　　えーでも、花火作ってるじゃないですか！

久美子　　この花火大会が決まった時、父さんすぐに勇作さんに連絡して、も
う一度いっしょに花火作ろうって説得したの。そしたら勇作さん、
打ち上げの仕切りは出来ないけど、父さんが全部やるならって戻っ

トキ江　　てきてくれて・・・。
じゃあ問題ないじゃない
久美子　　うん、でも、いずれは一本立ちして一人前の花火師になってもらいたいって、父さんよく言ってるんだけどね。

勇作、戻ってくる。

勇作　　よし、続きやるぞ。

トキ江　　ねえ、明日仕込みするんでしょ？おにぎり作って持ってってあげるからね。

勇作　　おう、助かるよ。

久美子　　私も！

博士　　ありがとうございます！

トキ江　　あんた私の時にはそんなに喜んでなかったじゃないの。

良夫が酔っ払って帰ってくる。

久美子　　ブンさん？

勇作　　お前、酔っぱらってるのか？

良夫　　・・・(ふらふらと椅子に座る)

勇作　　飲めねえ酒飲んで・・・

久美子　　何かあったんですか？

勇作　　実はよ・・・

そこに影山が来る。

影山　　なんだなんだ、繁盛してるじゃねえか。

トキ江　　・・・あんた、また高さんにちよっかい出しに来たのかい！

高、影山の声を聞いて店の奥から出て来る。

影山　　ちよっかいって何だよ。俺は、高さんと取引のお話しにきたんだよ、
(高に)なあ。

トキ江　　取引じゃないだろう、あんたのは！

勇作　　なんだい、この人は？

影山　　(勇作たちに)あんたら、このチャンコロの仲間か？お前たちも中国人か？

博士　　あ、僕たちは日本人です。人類学的に言うと、モンゴロイド大人種に属しております・・・

影山　　モンドロイモ？？

博士 いや、イモじゃなくてですね・・・
勇作 お前、黙ってる。

トキ江 私たちはみんな高さんの友達だよ。
影山 なるほどな、お前みたいなパンパンにはチャンコロのお友達がお似
合いだ。

トキ江 ……私は豆腐屋だ。

影山 お前が作った豆腐なんて真っ黒で食べたもんじゃないだろう。しょ
せん、パンパンはパンパンだ！

高 ……体張って仕事するの、何が悪い。トキ江ちゃんの豆腐は世界
一おいしいよ！

影山 はあ？なんだ、お前この女に惚れてんのか？こいつ、あっちの方は
悪くないぜ。今度金払ってやらせてもらえよ。

高 ……トキ江ちゃんを侮辱する人、私、許さない。

勇作 高さん、やめろ！こんな奴、相手にするな！

影山 なんだ、やる気か？

高、影山に食ってかかる。やられる高。

良夫が、影山を振り向かせてパンチをくらわす。

影山 (良夫に) なんだ貴様！！

勇作 やめろ、やめろ！

影山、良夫を殴る。竹次郎、出て来る。

トキ江 やめて！警察呼ぶよ！！

影山 上等だ！

竹次郎 やめねえか！

影山 ……取引できなくなったら困るからな。(竹次郎に気づき) なあ、
あんたもさっさと決めろよ。

竹次郎 帰ってくれ・・・

影山、去る。勇作と博士が良夫を助け起こす。

勇作 おい、大丈夫か？

高 ブンちゃん、ありがとう。

トキ江 ごめんね・・・(出ていく)

高 トキ江ちゃん！

高、トキ江を追いかける。

竹次郎 (勇作たちに) お前ら、仕込みの続きやっちまいな。
勇作 でも・・・
竹次郎 やっちまいな。
勇作 ・・・・へい。
博士 はい。

勇作、博士、出ていく。
久美子、濡れた手拭いで良夫の顔を拭いてあげる。

久美子 大丈夫ですか？
竹次郎 ・・・・久美子。
久美子 ・・・・

久美子、出ていく。

竹次郎 あんた、作家先生なんだってな。

良夫 ・・・・昔の話です・・・

竹次郎 どんな本書いてたんだ？

良夫 子供の本です。

竹次郎 ほお・・・なんで物書きになったんだ？

良夫 なんで・・・。なんで竹さんは、花火師になったんですか？

竹次郎 俺か？・・・俺はな、人を笑顔にしてーと思っただ。

良夫 笑顔に？

竹次郎 花火見てる人たちの顔見てみな。みんな空を見上げて笑ってる。難しそうな顔しながら見てる奴なんて一人もいねーんだ。そんな顔が見たくて、俺は花火作り始めた。・・・だがな、戦時中は花火に使う火薬は全部、爆弾になっちゃったんだ。同じ火薬が、人を笑顔にする物にも、人を殺す道具にもなる。

良夫 ・・・・
竹次郎 そういう意味じゃ、活字も火薬と同じかもしれないな。
良夫 ・・・・

間

竹次郎 花火屋ってのはな、思い描く力がなきゃできねーんだ。

良夫 思い描く力・・・

竹次郎 ああ・・・想像すんだ。一つ一つの花火玉が空中で開く時、どんな色や形になるか。それを見る人の驚く顔や喜ぶ顔。それができねーと良い花火は作れねえ。

良夫 ・・・・

竹次郎

俺はな、戦時中は軍需工場で、毎日爆弾作ってた。お国のために！
って必死になつてな・・・あの頃は、自分が作った爆弾が落とされ
る相手の事を想像することが出来なかった。その相手に、自分たち
と同じように家族や友達がいる事なんて考えもしなかった。

良夫

俺はな、二度と人を殺す道具を作りたくねえ。人を笑顔にする花火
が作りてえんだ。

良夫

・・・

暗転

^ 11 ^

「りんどう」花火大会当日の朝

勇作、博士、久美子、高がいる。

高

ええっ！！どういう事？無くなってるって・・・

博士

だから、無いんですよ、打ち上げ用の筒がごっそりと！

高

あんなに沢山あったの、全部？

博士

はい・・・

高

盗まれたって事？

勇作

それしか考えらんねーだろう。

久美子

ごめんなさい、気づかなくて・・・

勇作

いや・・・花火玉は厳重に管理してても、まさか打ち上げ用の筒持
つてく奴がいるなんて思ってもみなかったからよお。

博士

でも一体誰があんなもの・・・

良夫が来る。

高

あ、ブンちゃん、大変！

良夫

聞きました。何か代わりになるものはないんですか？

勇作

いやあ・・・

良夫

他の町の花火師に借りるとか？

勇作

今、オヤジさんが電話してくれてんだけど、つかまんねーんだ。そ

博士

れに今日の今日じゃ無理だよ・・・

高

じゃあ花火打ち上げられないって事ですか？

間

博士

・・・延期はできないんですか？

勇作 この町の花火は昔っから8月15日って決まってるんだ！
久美子 どうしよう・・・

勇作 俺、とりあえず近所の人に聞いてくる。
良夫 何をですか？

勇作 あれだけ大量の筒だ、誰か運んでるの見た奴がいるかもしんねえだ
ろう。

博士 僕も行きます。

高 私、中国の知り合いに聞いてくる。

良夫・久美子 お願いします。

勇作、博士、高、出ていく。竹次郎、店の奥から出て来る。

竹次郎 ダメだ、重森もつかまんねえ。

良夫 竹さん、もしかしたら、あの男じゃないでしょうか。一昨日来た・・・

竹次郎 あのヤクザもんか。

良夫 あの男の連絡先分かりますか？

竹次郎 ああ、確か・・・。

竹次郎、出ていきかけると、影山がやってくる。

影山 いい天気だな。花火上げるには最高だ。

良夫 あなた・・・打ち上げ用の筒、知りませんか。

影山 筒？

良夫 今朝、作業場から無くなってたんです。

影山 ほお。

良夫 どこにあるか知りませんか？

影山 さあ・・・。

あの筒が無いと、打ち上げができないんです。花火大会が中止にな
ってしまうんです。何としても今日の花火大会を成功させなきゃい
けないんです！お願いします！教えて下さい！お願いします！

間

影山 そうだなあ。たとえ知ってたとしてもただってわけにはいかねーな。

良夫・・・いくらですか？

影山 いくらなら払えるんだ？

良夫 言ってください。

影山 (竹次郎に) じいさん、あんたどう思う？

竹次郎・・・俺が立ち退きに同意すれば、筒のありか教えるのか。

影山 さすがじいさん、物分かりがいいなあ。(誓約書、ペン、朱肉を竹次

郎の前に出す。)

良夫 ダメです、竹さん……ここを離れたら、もう工場を建て直す金はないって言っていましたよね。

竹次郎

……

良夫 ダメです、竹さん！もう花火が出来なくなりますよ。それでもいいんですか？

影山

うるせーなお前は、黙ってる！

良夫

竹さん！

竹次郎

……お前さんに会わなかったら、どのみち花火は辞めようと思っ
てたんだ。

良夫

そんな……

竹次郎、署名する。

影山

はい、確かに、ご苦労さん。これさえあれば文句はないわい。お前
さんに会わなかったらか……

竹次郎

……筒はどこだ？

影山

その前によ、面白い事教えてやろうか。小野清二等兵って、あんな
の息子だろう？

影山

こいつの部下だったらしいぜ、フィリピンで。

竹次郎

！？

影山 いやな、うちの若いもんがカバン拾ってきてよ、その中に（ノート
を出して）これが入ってたらしいんだ。

ノートを取ろうとする良夫。

影山

（ノートを引っ込めて）おっと！（パラパラめくりながら）このノ
ートの中でこいつ、あんたの息子に申し訳ねえって、何遍も書いて
てさあ。（良夫に）お前、何やったんだ？

良夫

……

影山

ま、俺には関係ねーけどな。

良夫

……

影山

ああ、筒はな、仲野川の鉄橋の下、探してみな。

影山、去る。

竹次郎

……どうい事だ？

良夫

……

竹次郎

清と一緒にだったのか？

良夫

……

竹次郎 あいつの最期を知ってるのか？

良夫 ……

竹次郎 ……話してくれねーか…

良夫 ……自分が…自分が、清さんを殺しました。

竹次郎 殺した…

良夫 ……ルソン島のジャングルで襲撃に遭った時、敵の手榴弾が俺

の足元に落ちて…清さんはとっさに俺をかばって…気づい

た時には、あいつの右手と右足は根本から吹き飛ばされていまし

た……ものすごく苦しんでいた…でもすでに自決用の

手榴弾も底をついていて…残された左手であいつは俺の手を強

く握り締めて「殺してほしい」と…俺がうなづく…急

に穏やかな顔になって…「ああ、花火の音が聞こえる…」

そう言いました。

竹次郎 ……

良夫 ……自分は…この手で、あいつの首を…

竹次郎 ……

良夫 何度もお話ししようと思ってたんですが…

久美子、たまらなくなつて去る。

竹次郎 ……何度もお話ししようと思ったんですが…

良夫 清さんは、花火師になって、自分の花火を打ち上げたいと…言

つてました。

竹次郎 ……

良夫、お辞儀して去る。

竹次郎、ノートを手に取り中を見るが、急に胸の痛みが襲ってくる。

そこに勇作が帰ってくる。

勇作 だめだ、誰も見てねえや。俺、もう一回高木さんの所に電話…

竹次郎 勇作、筒の場所分かったぞ。

勇作 えっ？どうして？

竹次郎 影山が隠してたんだ。

勇作 くそ、あの野郎…

竹次郎 仲野川の鉄橋の下だよ。

勇作 急いで行ってきます。(行こうとする)

竹次郎 勇作…

勇作 はい。

竹次郎 筒が戻ったら、飯田の親方に連絡して、今日の打ち上げ仕切つて貰え。

勇作 飯田の親方って・・・オヤジさんは？

竹次郎 俺は体がもたねえかもしんねえ。

勇作 でもオヤジさんがあげなかつたら意味ねえじゃねえですか。

竹次郎 仕切りが途中で倒れたら、話にならねえ。この花火は・・・どうしても打ち上げてえんだ。

勇作 おやじさん・・・俺に仕切らせて下さい。

竹次郎 えっ？

勇作 オヤジさんの花火、俺が打ち上げます。

暗転

花火の上がる音。その音の中で、勇作の「次行くぞー！」「五寸玉、入れる！」などの声が聞こえてくる。

へ 12 へ

「りんどう」同じ日の夜

花火はまだ上がっている。店の奥から書類やカバンなどを持って出て来て、火を見上げる良夫。

別の場所と同じ花火を見つめる春子が浮かび上がり、消える。

店の外に竹次郎がやってくる。

竹次郎 きれいだろ・・・

良夫 ・・・はい。

竹次郎 自分で言うのもなんだけどな。

良夫 ・・・

一発大きな花火が上がる。

竹次郎 これが俺の最期の花火になるかもしれない・・・

良夫 竹さん・・・

竹次郎 行っちゃうのか？

良夫 ・・・はい。

間

竹次郎 清が・・・あいつが花火屋になりたいって言ってっか・・・

良夫 ・・・はい・・・お父さんのような花火を作りたいと・・・。

竹次郎 そうか・・・

良夫 ・・・

竹次郎 花火ってのはな、元々、あの世に逝っちゃった人たちを弔うために始まったんだ。富山や長岡では、三年前から空襲があった日に花火

大会始めたの知ってるだろう？

良夫 ええ・・・

竹次郎 俺もな、あの戦争で死ななきゃならなかった人達の為に、花火あげてえと思つてた。

良夫 ……

竹次郎 それをあんたが実現させてくれた。いろいろ世話になったな・・・
良夫 ……いえ

久美子、本を持って出てくる。竹次郎、久美子を察して去る。

久美子 ブンさん、あの・・・この本、ブンさんが書いたんですか？仁科良夫さん？

良夫 ……はい。

久美子 ブンさんが書いた本だったんですね。清が大好きだったんですよ、「明日花」。

良夫 あいつが・・・

大きな花火が上がる音。見上げる二人。別空間に清の姿が現れる。

久美子 この花火の中の星は、清が出征前に撒いた菜の花の種でできてるんです。

良夫 ……

久美子 清の明日花は、きつとこの花火なんです。

良夫 ……

良夫、久美子、そして清がそれぞれの思いで花火を見ている。

ゆっくり暗転

へ エピローグ へ

「りんどう」一年後の夏

黒い腕カバーをした博士と勇作が、予算書を眺めながら話している。

勇作 おい、博士、もう少しここの予算なんかかなんねーのか？

博士 ダメです。この中でやりくりして下さい。

勇作 融通きかねえな！

博士 今年から花火大会の規模も大きくなって、従業員が増えたんですから仕方ないでしょう？

勇作 そりゃそうだけどよお。

博士 できる限り節約しておかないと。また万が一立ち退きの話が出ても

工場を存続させるだけの資金は作っておきたいんです。
立ち退きな・・・去年の花火大会の後、町の人たちが立ち退き反対
の署名集めてくれた時は嬉しかったよな。

博士 マーケット、やめさせましたからね！

勇作 やっぱりオヤジさんの花火の力はすげーな。親父さんの為にも頑張
んねーとな。

博士 はい！

勇作 だからよ、もう少しだけ・・・

博士 勇作さんの給料削ってもいいなら。

勇作 それはやめよう。

博士 じゃあ、諦めて下さい。

勇作 くそー！ブンちゃん帰ってこねーかなあ！！ブンちゃん！

店の奥で「オギヤー！」と赤ん坊の泣き声がする。高、奥から出て来る。

高 ちよつとちよつと、店の前で大きな声出さないでくれる？しーえん

勇作 (希恩) ちゃん、起きちゃった。

博士 ああ、わりいわりい。

高 あれ？のぞみちゃんじゃありませんでしたっけ？

勇作 ああ、それは日本名ね。中国名は「こう しーえん」

高 立派な高校球児になりそうだな。(素振りのジエスチャー)

勇作 ナイスバッティング！いや、女の子です。「希望」の「希」に「恩
人」の「恩」と書く。

博士 良い名前ですね。

勇作 名前負けしねーようにしないと、博士みたいにさ！

博士 僕は、名前を呼ばれる時・・・

トキ江 (声) とりやー！(ボタン！)

勇作 ・・・・何だ？

高 ああ、うちの奥さん、アブラムシ退治してるね。

赤ん坊の笑い声。

勇作 笑ってるよ。

高 すでにママ、そっくりです。

久美子がハガキを持ってやってくる。

久美子 ねえねえ、もうすぐラジオ、始まるわよ！

勇作 おお、そうだった！高さん、ラジオ持ってきて！

高 あいよ！（店の奥へ）何て番組だっけ？

久美子 (ハガキを見て) えっと・・・「お話と歌」

高 ママ、始まるよ!

トキ江(声) あいよ!

高、ラジオを持ってきてつける。

ラジオ ……という事です。以上で二時のニュースを終わります。

勇作 博士、もっと大きくしてくれ!

ラジオ 続いて、「お話と歌」の時間です。

久美子 始まった!

高、赤ん坊を抱いたトキ江も出てきて一緒に聴く。

ラジオ 今日のお話は、「明日花」で知られる仁科良夫さんが先月出版され

た本の中から、ひとつご紹介します。

一同 おおー!!

ラジオ ある海に見える町の花火大会のお話です。読み手は、木下百合子さんです。

木下 仁科良夫作「夏空に咲く花」。「ある町に、とても腕のいい花火師が住んでいました。その町では、毎年花火大会が開かれていて、町の人達は夏の夜空に咲く花火を、とても楽しみにしていました。花火師の親方には息子が一人いて、僕もいつか、お父さんのような花火を作りたいと言っていました・・・」

一同、夢中で話を聴いている。別空間に浮かび上がる良夫の姿。
ゆっくり暗転

― 幕 ―